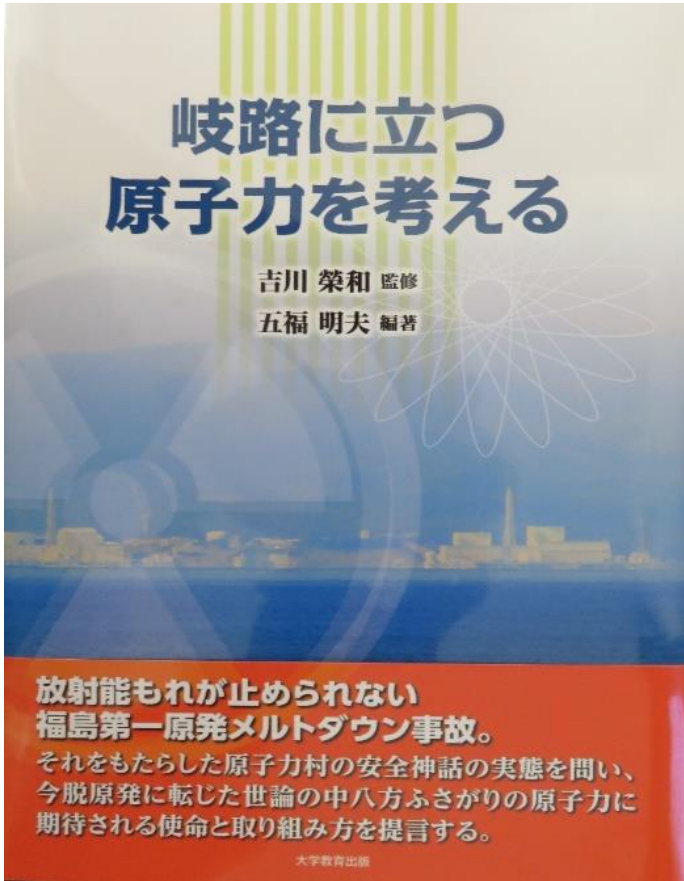


岐路に立つ原子力を考える



監修：吉川榮和

編著：五福明夫

出版社：大学教育出版（株）

ISBN978-4-86692-144-0

発行：2021.8.20

定価：3,000円＋税

====監修者より====

地球温暖化による異常気象(集中豪雨、土石流の発生)：大地震、津波：疫病蔓延……。大きな被害の出るたびに「安全安心の確保」が叫ばれます。安全は技術の問題、安心は受け手の心の問題。そこに受け手を安心させるための「安全神話」が登場します。

本書では、原子力を実例に、「安全神話」の誤ったあり方とその社会影響を考えていただきたいと念じ、出版しました。

====概要====

事故後10年を経ても放射能漏れが続く福島第一原発。そのメルトダウン事故をもたらし原子力村の安全神話の実態を問い、さらに今や岐路にある我が国の原子力開発の状況を展望。脱原発に転じた世論の中、原子力に課せられた使命を考究する。

====主要目次====

- 第1章 日本の原子力揺籃期から福島事故まで
- 第2章 福島事故の結末—様々な事故調査・検証の系譜と原発世論の変化
- 第3章 原子力安全神話を検証する
- 第4章 原子力防災計画を考え直す
- 第5章 原子力損害賠償制度—福島事故の損害賠償の課題
- 第6章 増加した廃炉と放射性廃棄物の処理処分問題の複雑化
- 第7章 福島事故のもたらし原子力の将来像変化
- 第8章 規制と事業者による軽水炉原発安全性向上の課題
- 第9章 社会の原子力への信頼回復への課題
- 第10章 大学における原子力人材育成と課題

本書を購入希望の方へ

シンビオ社会研究会会員の方には 会員価格にて提供しています。下記までご連絡ください。

シンビオ社会研究会事務局(メールアドレス：symbio.reserch.office@gmail)